

『南山神学』44号(2021年3月) pp. 77-97.

アウグスティヌスの回心における障害の問題

—『告白』第8巻についての一解釈—

岡寄 隆哲

序

『告白』第8巻は、ミラノ庭園での回心に際しアウグスティヌスの心内に生じた熾烈な霊肉の闘争を叙述している。回心の成就を最後まで決定的に妨げていた障害の問題について、従来多くの研究がアウグスティヌスにおける肉欲、すなわち性的な意味での情欲の問題を焦点とする考察に終始してきた。たしかに性的情欲は当時のアウグスティヌスを深刻に悩ます問題であり、実際的な「障害 (*impedimenta*)」として働くものだったと言えよう。しかしながら注意しなければならないのは、アウグスティヌスにおいて情欲の障害は決して性的な意味での情欲に限定されるものではなく、また性的情欲を含むそうした諸々の情欲は、その由来が根源において「転倒した意志 (*uoluntas peruersa*)」の問題だということである。回心の障害の問題をその深層構造において正しく見きわめるためには、アウグスティヌスの深奥において不可解な仕方で神に逆らう転倒した意志の問題、およびそれとの関係上で位置づけられる情欲の働きについて理解するのだからなければならない。

本稿が特に注目するテキストは、回心前の心的状況について語られた次の5章11節の言葉である。

「しかしながら私は、依然、地上的な事柄にとらわれており、あなたの兵士として仕えることを拒んでいた。そして、そうしたすべての障害から、妨

げられることのほうを恐れるべきであるのに、解放されることのほうを恐れていた (et impeditis omnibus sic timebam expediri, quemadmodum impediti timendum est)」。

ここには、およそ人間の回心という内的出来事をめぐるきわめて微妙な事態、およびその特有の困難さが示されているものと考えられる。すなわち他ならぬ障害 (impedimenta) として自身がすでに認めるところの事柄について、ここではなぜに、それらから解放されること (expediri) のほうを恐れたと言われるのか。果たしてここに示されるのはどのような事態であったか。

回心はアウグスティヌスにおいて、神に逆らう古い意志を主軸とする人間が、神に従う新しい意志を主軸とする人間へと転換する意志をめぐる出来事であった。そこでの障害の問題をとおして示されるパラドクスは、新しい意志主体として最も求めているものこそが、同時に、古い意志主体として最も拒むところのものであるという事態である。本稿では、古い意志を主軸として神に敵対する回心以前の人間主体にとって、情欲の障害は障害であるよりも、むしろ自己を守る逃避手段、および防衛手段ではなかったかとの考え方を示すことにしたい。

第1節ではまず、第8巻の回心における情欲の障害がかならずしも性的情欲に特化したものではないことについて確認する。次いで第2節では、情欲の根源としての転倒した意志の問題について、またそれをとおし受けとめ直される情欲の働きの位相について検討する。最後に第3節では、そうした情欲の障害の受けとめ方について、改めて第8巻で展開される回心の戦い、すなわち神・自己の意志をめぐる戦いの相をとおして考証する。

1. 回心の障害における性欲と情欲の問題

第8巻の回心場面は、最終幕において、アウグスティヌスがパウロの『ローマの信徒への手紙』13章の次の文言を眼にしたことによって成就したとされる。「宴楽と泥酔、好色と淫乱、争いと嫉みとを捨てよ。主イエス・キリストを着

よ。肉欲を満たすことに心を向けるな」¹。ここに示される内容、およびその後の独身修道生活への移行などの事実より、回心を妨げていた障害はもっぱら性的事柄にかんする情欲の問題であり、その回心は端的にそうした肉欲の克服と放棄であったとする解釈が大勢を占めてきた。

近年の研究では、たとえば Robin Lane Fox によれば、第 8 巻でアウグスティヌスの回心の契機となった二つの大きな回心譚（回心体験者のエピソード）のうち、最初の事例であるウィクトリヌスの回心譚で示されたのは弁論術教師という栄職の放棄であり、それは諸々の情欲のうち名誉と利得（財産・富裕）にかんする欲望の放棄を実例として示すものではあったが、未婚であったウィクトリヌスにとって性的な事柄の放棄は問題になっておらず、その実例はアウグスティヌスが做すべき内容としてはいまだ不十分なものであった。それに対し、ポンティキアヌスをとおして語られた二人の宮廷付き監察官の事例、すなわち彼らが婚約者を有しながら信仰生活への専念のためにそれまでの生活路線を放棄したとのエピソードによってこそ、アウグスティヌスはみずからも、最後決定的で根本の障害であった性的情欲の断念に至りえたとのことである²。

性的情欲の問題が、回心への決断を妨げる障害として実際的に立ち塞がる問題であったのは確かと言えよう。しかしながらまず注意すべき点としては、アウグスティヌスにおいて情欲の問題が語られる際に性的情欲のみが単独で取り上げられることはほとんどないということである³。ポンティキアヌスをとおし

¹ *Confessiones*, 8, 12, 29.

² Cf. Robin Lane Fox, *AUGUSTINE Conversions and Confessions*, Penguin Random House UK, 2016, pp. 275-284. 近年の研究のうち他に Brian Dobell も、「アウグスティヌスにとって回心への主要な障害は独身生活に *commit* することへの彼の無力さにあった」と述べる (Cf. *AUGUSTINE'S Intellectual Conversion The Journey from Platonism to Christianity*, Cambridge University Press, 2009, p. 19.)。

³ 『告白』全編をとおし、アウグスティヌスは「支配したい、眺めたい、感覚したいという情欲」 (*confessiones*, 3, 8, 16), すなわちそれを (順番を替えて) 言い換えた「目の欲、肉の欲、世間的野心」 (*Ibid.*, 10, 30, 41) について、あるいは「名誉と利得と結婚」にかかわる情欲 (*Ibid.*, 6, 6, 9) について問題にする。そのうち第 8 巻で性的情欲 (肉欲) と合わせて特に問題とされるのが世俗の野心や名誉にかんする情欲である。それは回心の最終幕で眼にした『ローマの信徒への手紙』13 章の言葉で言えば、「宴楽と泥酔、好色と淫

た二人の宮廷付き監察官の回心譚が始められる6章13節冒頭で言われているのは、「私を固く縛り付けていた肉欲 (*desiderii concubitus*) の絆と俗事への奴隷状態 (*saecularium negotiorum seruitute*) から、あなた〔神〕がどのようにして解き放ってくださったかを告白する」というものであった。Robin Lane Fox のように二つの回心譚について二段階的にとらえ、前者をキャリアの放棄、すなわち世俗的野心や名誉心（それに伴う利得）の放棄の契機、後者を肉欲・性的情欲の放棄の契機としてはっきりと振り分けて、後者においてこそ最後決定的な障害との直面、およびその克服の過程が示されたとするとらえ方には無理が認められると言えよう⁴。

それに対し、問題となる箇所として多く指摘されてきたのは、最後の内的葛藤の場面で示される11章26節中の次の言葉である。「私をとらえて離さなかったもの、それは無駄なものの中でも無駄なもの (*nugae nugarum*)、虚しいものの中でも虚しいもの (*uanitas uanitantium*)、私の古くからの女友達たち (*antiquae amicae meae*) であった」⁵。回心の根本の障害を性的情欲と見なす立場によれば、アウグスティヌスをして「とらえて離さなかった」ものとしてここで示される三種の語句のうち、最後の「私の古くからの女友達たち (*antiquae amicae meae*)」こそが、そのあとで続けられる言葉の「肉の衣をこっそりと引っ張って」、「お前はわれわれを捨てるつもりなのか」、「そうすればお前はあのこともこのことも (*hoc et illud*) できなくなるのだ」等々といった性的誘惑を思わせる言葉と合わせて、最後決定的な障害が諸々の情欲の中でも性的な事柄に存していたことの論拠だとされる。さらにまた、続く11章27節で、そうした情欲によって引きとめられている状況のアウグスティヌスに対し、反対方向から登

乱」といった酒色にかかわる内容に続けて言われる「争いと嫉み」にかんする内容に対応するものと言えよう。なお第8巻で性的情欲を特化して問題にしているように見える例外的な箇所としては1章2節が挙げられる。

⁴ 二人の宮廷付き監察官たちの回心は「皇帝の友人たち (*amici imperatoris*) となること」から「神の友となること (*amicus dei*)」への決断として語られており、世俗的キャリアの放棄ということも大きな要素を占めていたと言えよう (Cf. *Confessiones*, 8, 6, 15)。

⁵ *Confessiones*, 8, 11, 26.

場して語りかけることになる「貞潔 (continentia)」の女神の姿、すなわち「私
 がそのほう〔神のほう〕に顔を向けながら、しかもそちらへと飛び移るのをた
 めらっていた方面から」姿を現わし、神に対し「身を投げかける」ことを優し
 く促す「清らかで威厳に満ちた『貞潔』」について、それが先の「私の古くから
 の女友達たち (antiquae amicae meae)」と(女性名詞どうしでの)対比構造に
 置かれるものと考えられることで、やはり最後の葛藤で問題とされる障害は性
 的事柄にかかわる情欲だとする解釈が多く支持されていると言えよう。

しかしながら、上の 11 章 26 節のテキスト中でまず注意しなければならない
 のは、アウグスティヌスの回心を引きとめていたとして語られる「古くからの
 女友達たち (antiquae amicae meae)」という語句は、それに先立って示される
 「無駄なもののうちでも無駄なもの (nugae nugarum)」、
 「虚しいものうちでも虚しいもの (uanitas uanitantium)」という二種類の語句と、あくまで並列関
 係において語られるもの、あるいはそれらの語句の言い換えとして示されるも
 のではないかということである。加藤信朗によれば、二種類のうちとりわけ後
 者の「虚しいものうちでも虚しいもの (uanitas uanitantium)」という語句は
 旧約聖書の『コヘレートの言葉』全巻を貫くキーワードであり、『(神から外れ
 る) この世的なものへの執着』一般を意味するものに他ならない。そしてこ
 れに続いて示される「私の古くからの女友達たち (antiquae amicae meae)」は、
 「この『コヘレートの言葉』の言いかえとしての修辭的表現」であり、それは
 「『性的執着』に限られない『(神から離れる) この世的なものへの執着』一般
 を、アウグスティヌスがここで擬人化して」表現しているものと考えられるべきも
 のなのである。したがって加藤によれば、後に続く「あのこともこのことも (hoc
 et illud) できなくなる」云々として語られる内容についても、それらは「性的
 な欲望には限定されないさまざまな『この世的な欲望』の対象全般」を言っ
 ていると考えるのが自然であるとされる⁶。

⁶ 以上について加藤信朗『アウグスティヌス『告白録』講義』、知泉書館、2006年、330頁参照。なお加藤は Pierre Courcelle が回心体験の実質的な核心を「弁論術教授の辞任」に

R. J. O'Connell も、こうした加藤の見解と同様、上のテキスト中の「古くからの女友達たち (antiquae amicae meae)」については、それが性的な快楽をほめかす表現であるとしても、その言葉が回心の障害の中心を示すと見なすべきではなく、そうした性的情欲の問題はその前の「無駄なものうちでも無駄なもの (nugae nugarum)」, 「虚しいものうちでも虚しいもの (uanitas uanitantium)」というより包括的な情欲内容の一部門を示すものとして理解すべきであると述べる。さらに O'Connell は、「私の古くからの女友達たち」との対比において語られるように見える「貞潔 (continentia)」の語については、第 10 巻 30 章 41 節で「たしかにあなたは、肉の欲と目の欲 (好奇心) と世間の野心とから、身を慎む (continere) ように命じたもう」として、continentia の動詞形「慎む (continere)」が肉欲に限られない情欲全般に対応する徳として示されていることに注目し、それが『告白』の用語法全般において性的欲望のみに対応する限定的な意味での徳であるよりも、すべての情欲に対する「慎み」を意味するものであり、情欲全般に対応した根本的な徳と見なされるものであると述べる⁷。したがって 11 章 26 節において登場する人格化された理念としての「貞潔 (continentia)」の女神も、性的情欲に限らず、アウグスティヌスにとって、そ

見ている点に同意し、アウグスティヌスの回心を妨げる情欲としては弁論術教授職に伴う世俗的な野心が中心であったと見る。それは「なぜなら、弁論術の教授の栄職はミラノの宮廷における栄誉ある地位、皇帝や貴族たちとの親しい関係、また、さらに高い地位への野望、安定した生活 (収入)、そして、おそらくは良い家柄の子女との結婚のすべてを含むものであり、そこには『名誉』, 『利得』, 『食欲』の三つ組みがすべて含まれているから」とのことである (加藤前掲書, 331 頁参照)。

⁷ Cf. R. J. O'Connell, *Images of Conversion in St. Augustine's Confessions*, Fordham University Press, 1996, p. 249-250. O'Connell はまた、7 章 18 節に示される「われに貞潔と禁欲の徳を与えたまえ」という青年時代のアウグスティヌスの祈りの言葉に注目し、アウグスティヌスの用語法において「貞潔 (continentia)」と「禁欲 (castitas)」とは使い分けられており、後者の「禁欲 (castitas)」が主として性的事柄にかかわるより限定された意味での徳であるのに対し、前者の「貞潔 (continentia)」は情欲全般にかかわる根本的な徳であると言う (O'Connell, op., cit. p. 247.)。

れに身を任せることですべての虚しい情欲を手放せるいやしの力として示されるものと考えられるのである⁸。

アウグスティヌスにおいて、情欲 (*libido*) とは端的に神を差し置いてこの世に赴く魂の諸性向の全般を意味する⁹。すなわち「肉の欲、目の欲、世俗の野心」であれ、「名誉と利得と結婚」にかかわる事柄であれ、その種類はいずれにせよ、それは創造主なる神からの離反 (*aversio a Deo*) 状態に合わせて人間のうちに生じる被造物への偏執 (*conversio ad creaturam*) 状態である。11章26節に示される「女友達たち」や「私の肉の衣」や「貞潔」といった諸々の言葉には性的なニュアンスが含まれるとしても、それらは最後の葛藤を経て展開されるアウグスティヌスの回心劇を劇的に示すための象徴的表現、および情欲全般を代表するものとして基本的に使用される語であったと言えよう。

2. 転倒した意志と情欲の問題

性的情欲を含めた諸々の情欲は、神の秩序を逸脱する魂の諸性向として、アウグスティヌスにとってそれじたい回心 (*conversio ad Deum*) の妨げとなるものである。しかしながらそうした不自然な魂の諸性向としての情欲の障害は、そもそもいかなる仕方で成り立ち、実際に働くものであるか。そこにおいて問われる必要があるのは意志の問題である。回心の障害の問題はアウグスティ

⁸ O'Connellが注意を促すのが、一般にアウグスティヌスの用語法において、性的事柄にかかわる障害が *uincula* (縄), *catena* (鎖), *ligationes* (拘束) といった「縛り付ける (*tying him up*)」種類の言葉で示されるのに対し、世俗的事柄にかかわる障害は *iugum* (横木), *onus* (負担), *sarcina* (重荷) といった「押さえ込む (*weigh down*)」種類の言葉で示されているということである。その際アウグスティヌスが最後の葛藤の場面で, *nugae nugarum, uanitas uanitantium, antiquae amicae meae* のささやかかけを振り切って, *continentia* によって呼ばれている方向へと赴くときの動詞として用いられるのは *transire* (飛び移る) という単語であり, これは「押さえ込む」種類の障害である世俗的事柄に対応する言葉だと言う。ゆえに O'Connell によれば, ここに示される障害はまずもって世俗的な事柄全般にかかわる「虚しきもの」であり, 性的事柄もその中の一要素として見なすべきであると言う (O'Connell, *op.*, *cit.* pp. 247-248.)。

⁹ Cf. *Ad Simplicianum de diversis quaestionibus*, 1, 2, 13.

ヌスの魂における意志と情欲の関係性、さらにはそれらの固定形態としての習慣の問題も含めて構造的に理解するのでなければならない。

第8巻5章10節で、アウグスティヌスはウィクトリヌスの回心譚に接した際の自身の心的状況について、次のように述べている。「私もそれを〔ウィクトリヌスのような回心を〕渴望していたが、縛られていた。それも他人の意志によってではなく、自分自身の鉄の意志によってであった (*cui rei ego suspirabam ligatus non ferro alieno sed mea ferrea uoluntate*)。敵 (*inimicus*) は、私の意志をつかまえ、鎖をこしらえてがんじがらめにしてしまった。実際、転倒した意志から情欲が生まれ (*ex uoluntate perversa facta est libido*)、情欲に仕えているうちに習慣が生まれ (*et dum seruitur libidini, facta est constuetudo*)、習慣に逆らわずにいるうちにそれは必然となってしまったのである (*et dum consuetudini non resistitur, facta est necessitas*)」。ここにはっきりと示されているように、根源の問題として受けとめられているのは意志の問題である。情欲の障害はその根源において、「転倒した意志 (*uoluntas peruersa*)」の問題として理解されている。すなわち情欲およびその感官の対象によって意志が転倒したのではなく、転倒した意志によって情欲が生じたと言われるのであり、さらにはその情欲が習慣化し常態化することで、固定化した諸情欲への隷属体制 (=鉄の意志) が形成されるに至っていたとされるのである。

「転倒した意志」とはすなわち、諸情欲の源として神との関係を拒否し、神に反抗する神への反逆意志である。それについて第7巻では、悪の起源の問いをめぐって次のように言われていた。「不義とは実体ではなく、至高の実体である神、あなたから背いて、最も低いものへと落ちて行き、内なる自己を投げ捨てて、外部に向かって膨れ上がって行く意志の背反・転倒 (*uoluntatis peruersitas*) に他ならない」¹⁰。もっともこうした転倒した意志を起源とし、習慣化し必然化した情欲が支配する魂の在り方に対し、5章10節で続けて語られるのは、「しかし他方では、ただあなた〔神〕のためにあなたに仕え、あなた

¹⁰ *Confessiones*, 7, 16, 22.

を享受したいという意志」が、「新しい意志」としてアウグスティヌスのうちに生じ始めていたということである¹¹。しかしながら、「この新しい意志は、古さによって強固になった初めの意志を克服するだけの力をまだ持ってはおらず、かくして「一方は肉的で他方は霊的な二つの意志が、衝突し争い合い、魂をずたずたに引き裂いた」として、これ以降第8巻後半の全体をとおし、アウグスティヌスの心内での回心に向けた霊・肉の闘争が激化して行くことになる¹²。

ここで言われる霊・肉の闘争についてまず確認しておく必要があるのは、「霊的 (spiritualis)」、 「肉的 (carnalis)」というここでの対概念は、アウグスティヌスとその引用元とするパウロの『ガラテヤ書』(5:17)における用法と同様、人間の魂と身体とに直接結びつくものではなく、いずれもが心身を伴う人間全体の在り方として、霊的＝「神に従う新しい意志主体の在り方」、肉的＝「神に反抗する古い意志主体の在り方」を指すということである¹³。すなわちここにおいてアウグスティヌスの「心という密室の中で」¹⁴展開される戦いは、神を神ゆえに(神自身の意志に従って)享受せんとする新しい意志を主軸・主体とした「新しい人間」と、それに抗するところの転倒した意志および古い意志を主軸・主体とした「古い人間」との戦いなのである。

神を求める神探求のモチーフは、『ホルテンシウス』体験以来、アウグスティヌスの探求の生において(知恵探求のモチーフとともに)一貫して変わらぬ中心モチーフであり続けてきたと言っていいであろう¹⁵。とりわけ第7巻で語られる「プラトン派の書物」に導かれた「在りて在るもの」の体験をとおし、回心前の段階において、神へのあこがれとその探求心は遥かに強度を増すものとな

¹¹ Cf. *Confessiones*, 8, 5, 10.

¹² Cf. *Confessiones*, 8, 8, 20.

¹³ 周知のようにパウロ＝アウグスティヌスにおける霊・肉の対立はマニ教的な善悪の実体的二元論は勿論、ヘレニズム的な心身二元的人間論にもそのまま対応するものではない。Cf. *De civitate Dei*, 14, 2, 1-14; 5, 1.

¹⁴ *Confessiones*, 8, 8, 19.

¹⁵ その意識はマニ教への逸脱時代をも含めて貫かれていたと見てよい。

っていた¹⁶。しかしながら第8巻後半以降、「精神が身体に命じると身体は直ちに従うのに、精神が自分に命じると逆らう」¹⁷として展開される純粹熾烈な意志の戦いにおいて具体的に暴かれることになるのは、みずからの魂の現実としての転倒した意志の事実であり、魂の深淵において隠されていたそうした神拒絶および神逃避のモチーフだったと言えよう¹⁸。すなわち回心の戦いの根源的な局面で問題とされるのは情欲の障害であるよりも、根本において情欲以前の、不可解な仕方て神に反抗する転倒した意志の問題である¹⁹。そうした転倒した意志を主体とするアウグスティヌスの「古い人間」がみずからの姿を暴かれ、人間全体として「死に死んで、生に生きること」²⁰、すなわち新しく生まれ変わることを拒むことで、回心は最後のぎりぎりまで妨げられていたと考えられるのである。その意味で、転倒した意志の現実こそは、アウグスティヌスの回心を妨げる最内奥の障害そのものであったと考えるべきであろう。

では以上のように、回心の障害の問題を根源において転倒した意志、すなわち神探求（神希求）のモチーフに対抗するところの隠れた神拒絶（神逃避）のモチーフとしてとらえるこうした解釈において、情欲の問題はどのように位置づけられることになると言えようか。それに対し注目すべきテキストとして考察したいのが、本稿の序で示した次の5章11節の言葉である。

¹⁶ Cf. *Confessiones*, 7, 10, 16.

¹⁷ *Confessiones*, 8, 9, 21.

¹⁸ 第7巻の「プラトン派の書物」に導かれた神探求に対し限界をもたらしていたとして語られる「魂のうちにひそむ闇 (*tenebras animae meae*)」(*Confessiones*, 7, 20, 26.) というのも、そうした深淵にひそむ意志の転倒性として受けとめられるであろう。

¹⁹ 神に逆らう意志の由来について、『告白』第8巻では根本において「もっと自由な状態にあった人が犯した罪の罰」としてアダムの原罪に結びつけた解釈が示される (Cf. *Confessiones*, 8, 10, 22.)。もっとも他の著作では、悪の根源としての転倒した意志はもはやそれ以上に遡って由来を問うことはできないとする見解が示される (Cf. *De libero arbitrio*, 2, 19, 54; *De Civitate Dei*, 12, 7)。それはすなわち本来何の根拠もない、「非存在」でしかない何ごとかである。

²⁰ *Confessiones*, 8, 11, 25.

「しかしながら私は、依然、地上的な事柄にとらわれており、あなたの兵士として仕えることを拒んでいた(ego autem adhuc terra obligatus militare tibi recusabam)。そして、そうしたすべての障害から、妨げられることのほうを恐れるべきであるのに、解放されることのほうを恐れていた(et impedimentis omnibus sic timebam expediri, quemadmodum impediri timendum est)」。

上のテキスト中、二文目で「すべての障害 (impedimenta)」として言われるのは、一文目で「私にとらわれていた (obligatus)」とされる「地上的な事柄 (terra)」, すなわち神を差し置いてこの世を享受しようとする情欲の対象のことである²¹。しかしながらこれは一見して不思議な言明と見なされよう。というのも、ここではそうした情欲にかかわる事柄の障害をまさしく障害、つまりは自分にとって不都合なもの、好ましくないものとしてはっきりと認めているのである。ただしそうでありながら、まさにその「障害から解放されることのほうを恐れていた」と言われるのである。こうした微妙な表現は、第8巻中いくたびか繰り返されると言ってもいい。続く5章12節では、当時の心的状況として、一方では障害から解放されてまったくきつ方で神に身をゆだねることのほうが「自分の意にかなない、自分を納得させる」ものであることがすでにして確実にわかっていたとしながらも、他方では神への回心に対し「まだ待ってくれ」との言葉を発し続け、神が「即座にそうした願いを聞き届け、即座に情欲の病をいやされるのは困ると思っていた」と述べられる²²。

²¹ ここで「障害」の語が単数形 *impedimentum* でなく複数形 *impedimenta* で示されていることにも、情欲の障害が種々の内容を含むものであることが確認できると言えよう。

²² Cf. *Confessiones*, 8, 5, 12. すでに6巻11章20節でも次のような言明が認められる。「私は至福の生を愛しながらも、本来の座にある至福の生を恐れ、拒絶しながらもそれを捜し求めていたのであった」(*Confessiones*, 6, 11, 20)。第8巻では他に7章18節において、「しかも私の魂は、【神に】従ってゆくならば次第におとろえて、ついに死ぬよりほかないあの習慣の流れから解放放たれることを、まるで死ぬことでもあるかのように、恐れおののいていた」(*Confessiones*, 8, 7, 18.)とあり、さらに11章25節でも、「私が『別の

一方では最も望んでいることについて、他方ではなぜにそのことを恐れると
いうことになるのか。こうしたパラドクスを含む表現の背景にひそむのは、果
たしてどのような内面的な事態であると考えられようか²³。O' Donnell によれ
ば、ここで示される「解放されること」への恐れとは、アウグスティヌスにと
って「自分自身の隷属状態への直面」に対するものであったと言う²⁴。たしかに、
醜い自己の姿への直視、直面こそは、回心前のアウグスティヌスにとって最も
恐れることであったと言えよう。7章16節において語られるように、第8巻の
回心場面が最後の戦いに突入するきっかけとなるのは、ポンティキアヌスによ
る二人の宮廷付き監察官の回心譚に接したアウグスティヌスが、それまで「自
分を直視するのが嫌さに身を隠していた自分の背面から」神によって引きはが
され、自分のまなざしを「自分自身に向け直す」ように追い込まれることによ
ってであった²⁵。そして回心はその戦いの頂点で、神の前で「ついに私が自分自
身の前に丸裸にされる」²⁶ことをとおして最終幕へと導かれることになる。

では果たして、アウグスティヌスがそこにおいて直視直面し、みずからに対
し暴露されるのを恐れていた自己の姿とはその本質において何であったか。先
の考察より、それはまさしく情欲に囚われた惨めなおのれの姿ということにと
どまらず、またもっとそれ以前に、そうした隷属状態を生み出すところの転倒
した意志の姿そのものであったと言えよう²⁷。ではその場合に、先の5章11節
のテキストにおいて、障害である「地上的な事柄 (terra)」すなわち情欲の対象

もの』になろうとする瞬間は、近づけば近づくほど、ますますはげしい恐怖の念を心の中
に打ちこんだ」(Confessiones, 8, 11, 25)と言われる。

²³ O' Donnellによれば、ここに示されるのは、アウグスティヌスにとって自分が最も望
んでいることが、他方では最も自分が恐れているものでもあるというパラドクスであると言
う。アウグスティヌスはここでまさにその「成功の見通しに対し怯えている」のである(O'
Donnell, op., cit. p. 240)。

²⁴ Cf. O' Donnell, *Augustine: Confessions* Vol. 3, 1992, p. 35.

²⁵ Cf. *Confessiones*, 8, 7, 16.

²⁶ Cf. *Confessiones*, 8, 7, 18.

²⁷ それはすなわち、何の理由もなしにただ神に反逆する転倒した意志のむき出しの姿であ
り、そのような自己の姿が神に照らし出され、古い意志主体としての自己が死を迎えるこ
とこそ、回心前のアウグスティヌスが最も恐れたことだったと考えられる。

となる事柄から「解放されることのほうを恐れていた」という文言はどのように解釈されることになるであろうか。なぜにそうした情欲の働きから解放されなくなかったと言うのであるか。本稿ではそれについて、情欲とその対象はそこにおいて、すなわち回心前のいまだ転倒した意志を有するアウグスティヌスにとっては、みずからが暴露されることを回避して逃げ込むところの逃避手段、ないしはみずからが身を守るところの防衛手段として機能していたとの考え方を示すことにしたい。回心途上においてアウグスティヌスが最後まで情欲を手放せなかったのは、諸々の情欲がもたらす快樂の魅力やその吸引力そのものに屈したということであるよりも、もっとその深層において、「古い人間」としての自己がその正体を暴かれるのを恐れて情欲にしがみついていたと見るのできるのではなかろうか。こうしたとらえ方について、次節では、神と自己とのあいだで展開される回心の戦いの具体相に迫ることで考証する。

3. 神・自己の意志をめぐる闘争

第8巻の回心場面の叙述において特徴的なのは、全編をとおり戦争用語、ないしは軍隊用語に類する語彙が頻出することである (*militia, proelium, pugna, triumphus, uictoria, hostis, telum, circumuallo, receptaculum* ……). それはアウグスティヌスにとって、最終的に回心の成就へと結実するそこでの展開が、古い人間から新しい人間への転換において争われる文字通りの戦いとして体験されるものであったからである。また、回心 (*conversio*) とは彼にとって、神に敵対する状態 (*aversio a Deo*) の者から、「神に兵士として仕える (*militare tibi*)」者、すなわち「キリストの兵士 (*militia Christi*)」となることへの移行を意味するものであった²⁸。

²⁸ *Confessiones*, 8, 5, 11. 「キリストの兵士 (*militia Christi*)」の語はパウロの『テモテへの手紙第二』(2:4)を典拠とする。すでに第7巻末尾において、「プラトン派の哲学者たち」の生の歩みをキリスト者のそれに比し、前者が「天井の軍隊からの脱走兵」として、「木の繁る山頂から平和な祖国を眺めつつも祖国へと至る道を知らず、いたずらに道のないところを突き進み、獅子と龍を首領とする逃亡の敗残兵に包囲され、待ち伏せに遭う」者た

もつとも、第8巻の回心場面において語られるその戦いは、総じて特殊な性格を帯びた戦いであると言わなければならない。というのはまず、「古い人間」から「新しい人間」への新生として戦い抜かれるこの戦いにおいて、一方の勝利すべき主体が新しい意志を主軸・主体とするアウグスティヌスの「新しい人間」であるのに対し、他方の敗退すべき主体が古い意志を主軸・主体とするアウグスティヌスの「古い人間」だということである。すなわちここでは、その勝敗の主体のいずれもがアウグスティヌス自身なのである。回心の戦いとはまさに、まったくき仕方でのそうした自己の自己自身に対する戦いなのである。

さらに注意を向ける必要があるのは、次のことである。すなわちこの戦いとおり、「古い人間」としての自己に対し勝利を取めるべきは、たしかに「新しい人間」としての自己であり、「新しい人間」としてのそのアウグスティヌス自身なのであるが、しかしながらそれと合わせて、むしろそれ以上に、あるいはそれに先立って、「古い人間」を敵とするこの回心の戦いにおいて勝利を取め、かつその勝利を「新しい人間」としてのアウグスティヌスに対し導きもたらすのは、救済者としての他ならぬ神だということである。第8巻の冒頭で言われるのは、「あなたは私の縄目を断ち切られた。あなたに向かって私は讚美のいけにえをささげよう。どのように断ち切られたかを私は語ろう」²⁹との神への讚美であった。また、同じく回心の顛末を語り終えた第8巻末尾で神に対して述べられるのが、「たしかにあなたは私をご自分のほうに振り向けてくださった (conuertisti enim me ad te)」³⁰という感謝と讚美の言葉であった。

すでに述べたように、『ホルテンシウス体験』以来、神は勿論アウグスティヌスにとってみずからが求め続けてきた探求の目標である。また第7巻で語られる神体験を経て、すでにその実在の *certitudo* は獲得しながらも、いまだあずかりえていないその神との安定した *stabilitas* の関係性こそが、第8巻のこの回

ちであるのに対し、後者は「天の皇帝に配慮され、守護されながら、その国に至る道を進んで行く」者であると述べ、軍事用語を駆使した *militia Christi* への歩みについて語り始められている (Cf. *Confessiones*, 7, 21, 27.)。

²⁹ *Confessiones*, 8, 1, 1.

³⁰ *Confessiones*, 8, 12, 30.

心の戦いとおし自身が求める探求の内容に他ならない³¹。しかしながら前節で確認したように、そこにおいて障害として立ちはだかるのは、習慣化し必然化するにまで至った諸々の情欲と合わせて、何よりもそうした情欲を生み出す源としてのみずからの転倒した意志である。すなわち転倒した意志を主体とする「古い人間」に抗して戦い、それを克服するには、新しく与えられつつある新しい意志を主体とする「新しい人間」の力でもってしてはもはや不可能、不十分であり、そうした古い意志と新しい意志とを合わせ持つ現実の人間に対し根底より優越する神の救済の働きが必要とされるのである。回心の戦いは神を求める人間の戦いであるとともに、他方において、またより根本において、人間の魂のみずからのもとに獲得せんとする神の側からの救済の戦いとして展開されるのである。

神による救済の戦い、とりわけ古い意志主体に固執するアウグスティヌスの「古い人間」に対ししかけられる神の戦いは、『告白』のテキスト上、神の言葉（Verba）がアウグスティヌス自身の「はらわた（*uiscera*）」に染み入り、「胸もと（*praecordia*）」を通過し、最後にその「心臓」および「心」（*cor*）を貫き通すプロセスとして視覚的に示されることになる。すなわち加藤信朗によれば、元来身体の部位を示すこの三語は、「同時にアウグスティヌスの全体に神の言葉が浸透してきて、ついに全身全霊が神の言葉によって浸透されてゆく過程を如実に、また、順序を追って細かく叙述してゆく言葉として機能」しているとされる³²。まず第7巻末尾において、「あなたの使徒のうち最も小さい者と言われ

³¹ Cf. *Confessiones*, 8, 1, 1.

³² 加藤信朗は、第8巻に特に頻出する身体の部位にかんする語彙は単なる心的内容のメタファーとして示されるものではなく、あくまで「身心一如の統体」としての人間存在の現実的境位を示すものであると言う。「身も心もいわば別の面から、或る一つの同一なる存在を示している」のである。とりわけ *uiscera*, *praecordia*, *cor* という「この三語は、ここでは本来、肉体の部位を意味する語として肉体の内に位置づけられるものではあるが、この肉体における位置づけを用いて、ある精神上の境位がそこに表現されている」のである。加藤信朗「Cor, praecordia, viscera — 聖アウグスティヌス『告白録』における *psychologia* 又は *anthropologia* に関する若干の考察 —」、『中世思想研究』第8号、中世哲学会編、1967年、54—56頁参照。

るパウロの書を読んだとき、これらのこと〔聖句の内容〕はひじょうに不思議な仕方ではらわた (*uiscera*) に染み込んで行って」³³いと語られる。それに対し続く第 8 卷冒頭の 1 章 1 節では、「あなたの言葉はすでに、私の胸もと (*praecordia*) にへばりついていて。私はもう四方八方からあなたに包囲されていた」³⁴との状況・状態に移行する。加藤によれば、これは神の言葉がアウグスティヌスの身心の中心である *cor* にまでは達しないながらも、その直前の「胸もと (*praecordia*)」(正確な身体の部位としては心臓などの胸部臓器と胃腸などの腹部臓器とを隔てる「横隔膜」) にまで達して「へばりついていて (*inhaeserant*)」とされる状況であり、神の言葉によってアウグスティヌスの *cor* が身心ともに「四方八方から (*undique*) 包囲されて行っていた (*circumuallabar*)」状態を示す。*circumuallabar* という動詞のうち「*circum* は四方八方を表し、*uallabar* は、戦争用語である *uallum* (敵から防御するための『楯』『城壁』などを指す名詞) から派生した動詞」であり、これはすなわちアウグスティヌスの身心的境位において、「すでに神の軍勢によって自分が十重二十重に取り囲まれてしまっている状況」³⁵、すなわち「*cor* がいまや絶体絶命の境地に置かれている状態を述べているもの」³⁶である。やがて「*cor* の城壁が打ち砕かれる時に (*cor contritum*)、神の言葉は *cor* の内に入り、*cor* を占領し、*conversio* が完成する」。すなわち転倒した意志を基軸として自己を守ろうとするアウグスティヌスの「古い人間」に対し、神の軍勢が勝利するのである。その消息は最終的に回心体験の叙述を終えた第 10 卷 6 章 8 節の言葉、「あなたは私の心 (*cor*) を御言葉を持って貫かれたので、あなたを私は愛してしまった (*percussisti cor meum uerbo tuo, et amavit te*)」として示されることになる。

かくして回心の戦いにおける「新しい人間」と「古い人間」との戦いは、前者の後者に対する勝利、すなわち神を神のゆえに享受し、神の意志にすすんで

³³ *Confessiones*, 7, 21, 27.

³⁴ *Confessiones*, 8, 1, 1.

³⁵ 加藤前掲書, 198 頁。

³⁶ 加藤前掲論文, 64 頁。

従おうとする「新しい人間」が勝利することと合わせて、それ以上に、転倒した意志において神に逆らい、自己を守ろうとする「古い人間」が神の言葉によって攻撃され、そうした神の意志に対し屈服することによって成し遂げられる³⁷。では、回心のプロセスがこうした神・自己による意志の攻防として受けとめられた場合に、前節で示した5章11節のテキスト、とりわけそこで言われる「障害」はどのように解釈されることになるであろうか。すなわち回心前の状況として「地上的な事柄にとらわれて (*terra obligatus*)」おり、神に対し「あなたの兵士として仕えることを拒んでいた (*militare tibi recusabam*)」ところの 아우グスティヌスは、その際にそうした地上的な事柄、すなわち情欲にかかわる「すべての障害から (*impedimentis omnibus*)、妨げられることのほうを恐れるべきであるのに、解放されることのほうを恐れていた」とのことであった。

注意しなければならないのは、ここで言われる「障害」という言葉が、果たして 아우グスティヌス自身のどの立場、視点において示されるものであるかという点である。『告白』全巻中第1巻から第9巻までの前半生の回顧にあたる叙述は、アウグスティヌスが当時の自身の出来事を、その出来事以来十数年を経たいまの自分の立場で、(神の照らしのもとに) 回顧しつつ、神と人への告白として書き綴るものである。その場合に5章11節で、それより「解放されることのほうを恐れていた」と言われる「障害」は、回心の成就を確かな勝利の事柄として著述するいまのアウグスティヌスにとってはまぎれもなく回心を妨げる「障害」である。しかしながら回心の出来事をまさにその当事者として、新しい意志主体と古い意志主体のせめぎ合いにおいて体験せんとしている当時のアウグスティヌスにとって、それはかならずしも不都合なだけの文字通りの「障

³⁷ 第5巻10章18節では回心前のローマ滞在時代の自身のことについて次のように言われていた。「全能なる神よ、自分があなたに克服され救いに赴くことを願うよりはむしろ、私があなただけを克服して身の破滅となるほうを願っていた」。アウグスティヌスにとって回心とはまさしく自分が神とその関係を勝ち取ることであり、罪の囚われにある自分が神によってその魂の総体を勝ち取られることであった。後年の恩恵論争において示される恩恵優位の考え方も、こうした自身の体験に基づく確信が背景にあったと言えよう。

害」とは言えなかったであろう。たしかに5章11節において、「私はすでに自分のうちで否認していたもの」(古い意志主体)のほうに「より多くはいなかった」と述べられているように³⁸、すでにその時点で、新しい意志主体の「新しい人間」のほうがもはや優勢であり、「地上的な事柄(=諸々の情欲の対象)」は回心に向かうアウグスティヌスにとってはっきりと「障害」としてとらえられるものではあった。しかしながらなおも根強く残存し、回心に抵抗する転倒した意志に基づく古い意志主体の「古い人間」にとって、それらの「地上的な事柄」は、それにしがみつくことでみずからの身を守る逃避手段ないしは防衛手段としても機能するものだったと言えるのではなかろうか。

確認すれば、回心の戦いはアウグスティヌスにおいて古い意志主体を主軸とする「古い人間」と新しい意志主体を主軸とする「新しい人間」との戦いであるとともに、さらにその根本において、両者の戦いを導きつつ前者を負かし、後者に対し勝利をもたらすことでアウグスティヌスの魂の総体を獲得するところの神の戦いであった。すなわち種々のモチーフが交錯するこうした戦いの見きわめにおいて大事なものは、そこでの戦いの攻防およびその展開の叙述において示される言葉、とりわけ「敵」「障害」「要塞」「武器」「勝利」などといった諸々の戦争用語が、どの立場および視点からの、あるいはどの主体にとってのものであるかという問題である。回心という内的出来事に際し用いられるこれらの戦争用語は、その積極性および消極性における意味内容が同人物の霊と肉、あるいは回心前と回心後の立場とで反転するのである³⁹。

³⁸ Cf. *Confessiones*, 8, 5, 11.

³⁹ 4章9節で語られるウィクトリヌスの回心譚でも、回心の経過が同様に戦争用語を用いて示されており、そこでは次のように言われていた。「ところで敵は、高慢な者たちを身分の高さという威名を利用してつかまえ、他の者たちを、彼らに対するその者の権威という威名を利用してつかまえる。それゆえ、あたかも不落の要塞のように悪魔が占領していたウィクトリヌスの胸 (*Victorini pectus, quod tamquam inexpugnabile receptaculum obtinuerat*) と、大きな鋭い武器となって多数の人々を殺していたその舌とが強力なものと考えられていただけに、それだけあなた〔神〕の子供たち(信者)が彼の回心を喜んだのも当然だった。なぜなら私たちの王(キリスト)がこの強者を縛ってしまったのであるから」。当時高名な弁論術学者として名を馳せていたウィクトリヌスにとって、信仰のため職位を捨てることには大きな抵抗が伴い、それゆえ回心にあたりそうした地位や名誉

いまだ回心を果たす以前のアウグスティヌスにとって、5章11節で語られる回心に際した「障害」は、神に従おうとする新しい意志主体の「新しい人間」、およびその「新しい人間」を「不思議な仕方で (*miris modis*)」⁴⁰助け導く神とその軍勢（それは『告白』を執筆するいまのアウグスティヌスの信仰的立場よりはっきりそれとして理解される内容である）の側には正しく「障害」として認められるべき言葉であるのに対し、神に敵対する転倒した意志を主体とする「古い人間」としてのアウグスティヌスにとっては、それらは障害ではなく、むしろみずからの身心の中核 (*cor*) に迫る神に対し、その方への回心を拒んで身を守るべき防壁であった。「障害から解放されることのほうを恐れていた」という一見不可解な言明は、そうした当時の新しい意志主体と古い意志主体との抗争からなる回心の戦いの微妙な事態を背景として語られるものなのである。かくして『ホルテンシウス』体験での立志より第8巻末尾での回心成就に至るまでの歩みは、アウグスティヌスにおいて神探求の歩みであると同時に、神の迫りに対する隠れたところでの頑なな自己防衛の試みとしてもとらえられるのである⁴¹。

第8巻後半の意志の戦いにおいて頂点を迎えるその攻防は、本稿第1節冒頭に記したように、最終幕においてパウロの『ローマの信徒への手紙』13章の言葉、わけても14節の「イエス・キリストを着よ」との言葉を受け入れることで決着を見るに至る⁴²。「イエス・キリスト」を受け入れることとはアウグスティヌスにとって、「肉となった神の御言葉」⁴³を受け入れ、「人間たちと同じ皮の衣をまとった弱い神の姿を見て弱くされ、力を失ってその前にひれふし、代わり

が彼にとって障害として立ち塞がっていた。しかしながらそうした地位や名誉やまた弁論術の能力は、回心を望まない彼の心内の抵抗勢力にとっては、むしろそれらじたいが頼むべき要塞であり武器であったと言える。

⁴⁰ *Confessiones*, 7, 21, 27.

⁴¹ 『告白』の叙述にはアウグスティヌスの神探求と自己探求の並行的関係が認められるだけでなく、神逃避と自己逃避の並行的関係も並走して認められると言える。回心前の自己逃避の姿としては第4巻7章12節などが挙げられる。

⁴² *Confessiones*, 8, 12, 29.

⁴³ Cf. *Confessiones*, 7, 19, 25.

にその弱い神が立ち上ってひれふした彼らを起こしたもう⁴⁴という事態である。それはすなわち、神に対し最後まで抵抗する「古い人間」が、イエス・キリストをとおしみずからを武装解除するに至り、神の救済のわざに自身を明け渡して、神の意志への全面降服にあずかることを意味するものであった⁴⁵。

結び

『告白』第8巻で語られるアウグスティヌスの回心が困難をきわめた理由について、従来性的情欲を中心とした諸々の情欲が理由として挙げられてきたのに対し、本稿では回心の障害の根本は情欲（の快樂）の問題以前に、情欲を生み出すところの転倒した意志の問題であり、情欲の耽溺はむしろそうした転倒した意志の問題を覆い隠す手段として機能するものであったのではないかとの考え方を提示した。回心を前にしてアウグスティヌスが恐れたのは、情欲の放棄それじたいよりも、そうした自身の転倒した意志の姿への直視、直面であり、それをとおして古い意志主体の自己が死ぬことであった⁴⁶。

⁴⁴ *Confessiones*, 7, 18, 24.

⁴⁵ 回心以降も自己のうちに巢食う転倒した意志の病は完全に除去されるわけではなく、第10巻後半での自己省察に見られるように、「本来嘆くべき喜びと、本来喜ぶべき悲しみとが自分の中で争う」（*Confessiones*, 10, 28, 39.）といったパラドクスに示されるような内心の転倒した事態も存続し続ける。しかしながら回心以降の戦いはそれ以前のものとは異なり、アウグスティヌスにとって基本的に確信と安心を備えた「探求の自由」によって進められるものであったと言えよう。

⁴⁶ 本稿の考察は、アウグスティヌス自身がかならずしも明示的には語っていない事柄についての踏み込んだ洞察を含む。もっとも、『告白』はアウグスティヌスが自分でも定かには見通せない自己自身の事柄について、神の照らしのもとで神と他者とに告白する作品であり、そのような仕方での彼自身の探求の著作でもある。そこにはテキストをとおしテキストの背後の事象に目をこらすことで見えてくる著者の深層の言葉があると言えよう。加藤信朗は、アウグスティヌスのような著作家を理解する方法としては、「むしろ個々の作品について、それがおかれている個々の状況において、アウグスティヌスに、これらの言葉を語らせている、内に秘められた、語られざる“ことば”に著目することが、アウグスティヌスの思想に接近するために要求されることであり、アウグスティヌス自身は言葉として語らなかつた、内なる言葉のDynamikを、語られ、我々に残された言葉を通じて把握してゆく所に、今日の我々のPhilologosさらにはPhilosophusとしての務めがある」と述べる（加藤前掲論文、57頁参照）。また、本稿で紹介したO'Connellの著作も、『告白』におけるimage言語に焦点を当てた研究として、アウグスティヌスの意識下の内容にも考察の射程が向けられている点で興味深いものとなっている。

転倒した意志ゆえに生じる情欲（とその習慣）は、ある人には名誉欲が主であり、また別の人には物欲や金銭欲が主であるなど、その具体的な現れ方は種々様々でありえよう。アウグスティヌスの友人アリピウスの場合は、ある時期彼がそれによって「身を滅ぼすほど」であったという剣闘士競技への熱中がそれであったとも言える⁴⁷。しかしながらそうした諸々の情欲がそのいずれであるにせよ、アウグスティヌスが自身の回心場面をとおり明らかにしたように、人間にとってその根本の問題は、各人の最内奥に巣食う意志の転倒性（＝古い人間の「我執」）という普遍的な問題である。その意味で『告白』第8巻の回心の叙述は、一人の人間が生まれ変わる（新生の）プロセスの正道を示すものなのである⁴⁸。

⁴⁷ Cf. *Confessiones*, 6, 7, 11. アウグスティヌスにとって最後まで強力であり続けた性的事柄にかんする情欲はアリピウスにとっては彼があきれれるほどまったく問題にならなかった、ただし一時期、好奇心の情欲に負けて結婚を望むようになったと語られている（Cf. *Confessiones*, 6, 12, 22）。

⁴⁸ 山田晶は、アウグスティヌスの若き日の女性問題について人間味のある解釈を示した一般向けの好著『アウグスティヌス講話』の第一話で、「私は、教会の中で、いろいろな人が、いろいろな仕方では歩いているのを見た」（*Confessiones*, 8, 1, 2）との回心前のアウグスティヌスの言葉を引きつつも、「しかしアウグスティヌスが教会に近づいてきたとき、どうせ信者になるならば、思い切って一番難しい道を行こうという気持ちだが、だんだんと出てきたのではないか」との理解を示す（講談社学術文庫、1995年、47頁参照）。しかしながら本稿の解釈より、回心に際しアウグスティヌスが直面した問題の困難さは、一部の聖人やエリートに課せられる特別な禁欲的事柄としての困難さ（たとえば独身修道生活など）ではなく、その本質において人間が等しく直面すべき普遍的な問題における困難さであったと考える。それはすなわち聖職者であれ平信徒であれ、あるいは信仰の内外にかかわらず、根本において等しくすべての人を苦しめるところの転倒した意志（＝「古い人間」の我執）の問題、およびその克服の困難さである。その意味で（またそのように解してこそ）、『告白』第8巻で語られるアウグスティヌスの回心体験は、彼個人の特殊な体験としてではなく、われわれすべての人間にとってすぐれて範例的な事例として示されるものである。

『告白』のテキストは原則として *Les confessions, Bibliothèque Augustinienne Oeuvres de St. Augustin*, 13, 14, Desclée de Brouwer, Paris, 1962, 他のアウグスティヌスのテキストも同著作集を使用した。訳出にあたり『アウグスティヌス 世界の名著 16』（中央公論社）の山田晶訳に主として従ったが、文体や用語の統一のため言葉遣いを改め、また一部本稿の解釈に合わせて改めさせていただいた。なお引用文中の亀甲括弧〔 〕内の言葉は引用者（本稿筆者）による挿入である。

